

エッセイ

暗記よりも思考

山本文子

養老孟司『バカの壁』の中に面白い言葉を見つけた。

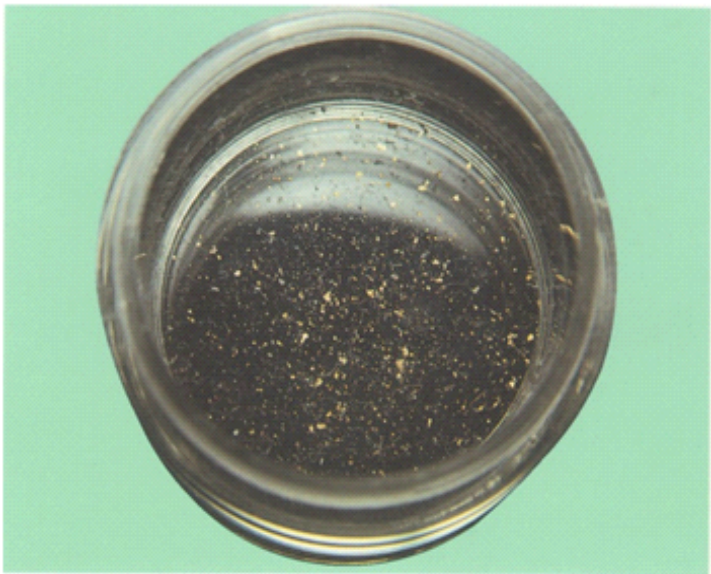
小タイトル「東大のバカ学生」としての記述だが、口述試験のとき幼稚園児並の回答をする学生がいた、と呆れ果て、かつ嘆き、入試の選別方法に問題があるのでは、と問うている。実は私もかねてから同様に感じていた。入試は暗記力による選別であって、思考、創造など高度な能力は試されていない。これでは真の賢者を選ぶ基準にはならない。加えて東大生が受ける教育自体にも問題がありはしないか。私の身近なところに五十代後半の東大出の男が二人いて、八十八歳の私とはまるで別世界に生きているかのごとく、考え方が異なり、意見が食い違うために時に論争に

なる。すると「無学なお前の言うことなんか」と私を侮る。確かに私は戦時中、学徒動員されて工場で働いたため無学だ。だが人生体験が三十年も私の方が長い。そこから獲得した人生の知恵についてはとんと考えが及ばないらしい。ということとは、愚かさの表われではないか。

養老孟司『ガクモンの壁』の中で超常現象に触れているが科学の踏み込めない分野については、不信感を抱いて書かれているように私は感じた。実は私が対立する二人の東大出との論議もそこに集中する。私は亡夫の初盆一九八八年以来現在まで同居の末娘と共に幾多の不思議体験を重ねたために、霊の存在を確信するに至った。念のために自

分の意思で精神鑑定も受けたがまったく正常であるとの太鼓判を精神科医から頂いた。末娘と私の顔や手だけでなく身辺に金粉がしばしば出現したのだが、東大出の二人は「霊などない」「金粉の出現など物理的にありえない」と断定してはばからない。彼らは科学万能主義か。私を精神異常者か嘘つきだと言いたいのか。私の怒りが沸騰した。霊や金粉については既に宗教界の多くが体験例続出で疑う余地のない問題とされてきていることも知らないらしい。「自分こそ叡智の最高峰に立つ人間だ」との自惚れが超常現象否定に繋がるのか。東大を過大評価する学歴社会は間違っているのではないか。

私があった家は九人家族だったが、その中で存在感が大きいのは祖母だった。明治初年生まれのため家族の中で一番の無学にも拘らず、思考能力や創造力に長けていた。一例を挙げると扇風機も冷房もない夏を乗り切るために、祖母は和服の襦袢の袖を外して身頃だけを身につけて涼を取るといふ珍しい人だった。固定観念に捉われない発想が幼い私の目には新鮮に映った。この祖母を見てきたがために、私は人間の真の賢さは学問とは別のところにあると考える人間になったのである。



(二〇一七年三月十五日)